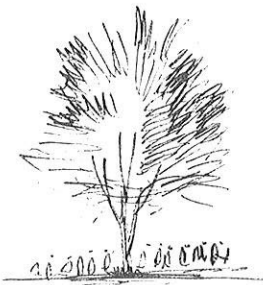


光の子



No.96 2001. 12. 25

- 人にしてもらいたいと思うことを、人にもしなさいと、
主は言われる。(ルカによる福音書 6 : 31)



「うれしい楽しいクリスマス」

え・中島英子

この年のたくさんのお支えに心から感謝し

クリスマスのお慶びのご挨拶を申し上げます

社会福祉法人 光の子どもの家

「薬 塚」

山風の騒いでゐたる薬を間引く

星ひとつ滲みだしたる芒かな

花野より水を引き込む堂守

薬塚に水争ひの香もすこし

冬耕のいつも遙かに一人かな

霜晴のまっすぐに飛ぶ鳥ばかり

川岸に芥が寄って十二月

黛 執 (『春野』主宰)

2つの文化に生きる

30

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

今年も一年がかけめぐり、キリストのお誕生をお祝いする祝福されたひとときがやってきた。毎年、この時期になると、自分の中で信仰の原点とでもいうか、改めて自分の信仰を問い直すチャンスを与えられる。夏の疲れを癒やす間もなく、教会行事が次々と行われる。教会セミナー、修養会、教会バザー。教会だけではない。子ども達が通う学校でもバザーが催され、山ほどのケーキ作りと力仕事で精を出す。

七つの教派で成り立っているアジア教会婦人会議日本委員会では年に一度の一日研修会が催される。四〇〇人以上参加するこの集会にはかなりの精力を使う。

そうこうしているうちにクリスマス

スアドベントが目の前に近づいている事に気づき、教会も教会学校もその準備に追われる。そして、気がつくくと、心身共にかなり疲れている自分がいるのである。

そして、「わたしの好きな聖句」を改めて読み直してみる。コリントの信徒への手紙二の九章「喜んで与える人を神は愛して下さる。」(God loves a cheerful giver.)「神はあなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分で、あらゆる善い業にみちあふれるように、あらゆる恵をあなたがたに満ちあふれさせる事がおできになります。」そうだ、神様が私達を愛して下さり、すべてを整えて下さっているんだと改めて気がついた時の安堵感。毎週、教会で礼拝を守りながら教会を一步出ると御言葉から離れた生活をしていた自分に気がつく。

先週の聖日礼拝で「神様にささげて生きる」と題して山ノ下恭二牧師よりマルコによる福音書十二章の貧しいやもめが自分の持っているお金すべてを献金したという話である。すべてを捧げるなんてすごいなあと思はついってしまう。自分の生活費はどうするのだろうか。少し残しておいたらどうだろう。等と現実的なことをつい考えてしまう。けれども

このやもめは自分の持っているものすべてをさい銭箱の中に入れた。その金額はほんのわずかなものだった。それを見たイエスは弟子達を呼び集めて、「このやもめは皆の中で一番たくさん入れた。」と言われた。皆は有り余る中から入れたが、この人は乏しい中から自分の持っている物をすべて捧げたからである。

私達が生きている世の中では自分が稼いだお金は自分の物であると考えるのが一般常識である。それはそうである。一生懸命働いたのだ。自分がそれに報われてお金をもらうのは当たり前だと思う。そしてそのお金を使って食べ物を買ったり、衣服を買ったりする。時間はだろうか。朝何時に起きて、どこへ行き、何時までに何をし、とすべて自分が決めていく。これも自分のものだろう。名誉はどうだろう。一生懸命したことで社会的な地位を得たり、人から誉められたりする。自分ががんばったんだから誉められるのは期待していたこと。と、これも自分のものにしてしまう。すべて計画をたてて自分が主体になって頑張る人生。これが世間一般の常識である。

けれども聖書は驚くべき事実を私達に知らせてくれている。実はお金も時間も名誉も私達がつけているす

べてはぜんぶ神様が用意してくださったものなのだ。中でもとびつきり神様が心を込めて用意してくださったものは「私達の命」なのだ。この貧しいやもめは自分の命を造り、自分を愛し、働きかけてくださる神様に心からの感謝の気持ちで捧げたのだ。感謝で胸が一杯になり、持っているものすべてを捧げずにはいられなかったのだ。

毎年この時期に心震える程感動することがある。それは神様がイエスという人間の形をとって貧しい馬小屋でお生まれになった事だ。そしてその生涯を通して持てるものすべてを私達人間のために捧げてくださった。イエス様のおかげで私達は「がんばる人生」から「生かされる人生」へと変えられたのだ。

クリスマスを迎える今、私も心から捧げる人になりたいと改めて思う。イエス様、この世に生まれてきてくださってありがとう。

お誕生日おめでとう。



光の子たちのクリスマス



いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。

(ルカによる福音書)

菅原 哲男



クリスマスの祝福を豊に分ち合える喜びのご挨拶を申し上げます。

不況とテロとテロへの報復戦争とで明けた二十一世紀劈頭の年、この国の子どもたちにとっても、決して喜ばしい世紀の始まりではありませんでした。虐待という言葉が社会的に認知された年になってしまったのです。産んだ親や家族が生まれてきた小さな子どもを打ち、叩き、蹴り、虐め、放り出し、生命身体を危機にさらすという恐ろしいことが、都市、農村、漁村など場所を問わず、間断なく発生してきているのです。

埼玉県の集計では、不適切な関わりである虐待による相談件数は、九月末日現在九〇六件で、これは一昨年の同じ時期(三五二件)の約三倍、同じく昨年の(五三七件)の約一・六倍に当たります。

モノやカネや利便などを追求して発展した文明の進歩が、人間にもたらしたものはよいことばかりではありませんでした。子どもたちから夢や希望を剥ぎ取られたのも文明に力があつたように思います。

先進国の中で、夢や希望を持てない子どもが最も多いのは日本で、他の諸国からずば抜けているのです。大手のメディアが毎年行う子どもの

意識調査の国際比較から確認されます。例えば、大人になったら宇宙飛行士や研究者や専門職などではなく、今のままでいい、食えるだけでいいなどと答える日本の子どもが大半で、他の諸国の逆数に当たります。フリッター志望が大学卒の三割を超えるのもそういった事情によるのでしょう。モノ、カネに偏った豊かさの追求の結果、文化や人の有り様の中で、最も弱い子どもたちをこんな状況に追い込んだのです。

具体的に見えるもの、聞くことのできるもの、触ることのできるものだけが全てであるような科学万能の流れに飲み込まれてしまったこの国の子どもたちは、夢や希望からかけ離れた存在になってしまっているのです。人の命やこころの在りようなどへの想像力が極端に痩せてしまった子どもが親になり、虐待の激発となつていえると思えるのです。

先頃の獅子座流星群を見た時のような、あるいは想像を超えた悲惨な戦場のTVなど、この世の事と思えない出来事などに出会い、この世でない世があることを想定します。自分の出生や死に立ち会うことができなないなど、人間の有限性を意識する時、無限なる全能者の存在を予期します。

先進諸外国で、宗教教育を大切にしながら、青少年に希望や夢を豊に育んでいるように、文明や文化は、そんな私達を超えた存在や全能なる者の否定のためにあつたのではなかった筈です。

この時代が産み出した虐待する親たちの状況を超えるために、もう一度、人間を超えるものの存在に気づき、人間の存在を実像で確かめ、やり直しながら子どもたちとの暮らしに励んできました。

児童養護施設光の子どもの家のクリスマスは、関わり合う全ての人々と共に祝い出来るようにと願って行われます。

クリスマスを待ち準備する四週間を経、いよいよその日を迎えて、大いなるもののご降誕という想像を超えた出来事と出会うのです。

想像を超えた出来事ゆえに、人間関係を決定するだろう想像力が豊に育まれるのです。

しかも、三〇億を超える人々の信仰の対象である神が、馬小屋で生まれたという驚くべき事実が、子どもたちの生い立ちよりも悲惨であつたことを確認し、少ない「へしあわせ」な思いに浸ることが出来るのです。

人間を最も低いところから救うという神の意志の事実なのです。

或る展覧会にて

十一月は、私にとっては大変忙しい月である。私が関係している三つの展覧会に、それぞれ作品を出さなければならぬからである。

今年は、十三日から十九日まで東京八重洲口近くの画廊で。二十三日から二十九日まで新宿の画廊で、二十二日から二十五日まで新宿とダブって秩父市で、という日程になっている。

こんな訳で、あっちこっち駆けまわることになるのだが、展覧会の会場やその関連で、思いもかけない人に出会ったり、思いもかけない事に遭遇したりする。

先日、東京八重洲口の画廊で、私は会場当番をしていた。入口で受付の椅子に掛けている時であった。

一人の品の良い、白髪交じりの女性が入って来た。軽く会釈をして芳名帳に記入しているのを、何となしに見ていると、渋谷区……と進んで……黒坂……と記入しているのだ。私は思わず叫んでしまった。「土居さん!! 何だ、土居さんじゃないの!!」と彼女の旧姓を叫んでいた。彼女はポカンとした顔で私を見ていた。

彫刻家 中島 陸雄

「ナカジマ・ナカジマですよ」と言うのと、両手で大きく手をはたき「中島君か!!」と、やっとわかったようであった。何年か会わなかった昔の同級生だったのである。

退屈な会場当番も、彼女の出現で急に昔話になったのであった。それにしても、二人とも、十八歳の昔の心にもどったものの、頭上には同じ程度の雪をいただいていたのである。

又、別な日、やはり展覧会の会場で、友だちから思わぬプリントを一枚もらった。その友達も、展覧会に立ち寄った見知らぬお客様からもらったものだそうであった。

北海道の標津市民文芸の会理事、佐野良二という方が新聞に書いた記事である。全文をそのまま出してみたい。

母の手紙

佐野良二

「だいぶ困っているやうですね。帰ると云(い)ひますがそれはいけません。(中略)母はお前を天才児として育てて来ました。母はそれが誇りだったのです(中略)。食べら

れなければ食わずに死になさい。何で死ぬのも同じ事です。」

これは標津出身の彫刻家・阿部晃工が、上京して修業中、貧困に耐えられず、立身を諦めて帰郷したいとの手紙に答えた、母トメの返事である。晃工二十二歳。叱(しつ)声はまだ続く。

「病気ででもあればどんなことでもしてやりますが、お前は母がいつ迄も優しい母だと思つて居るのは間違いです。そんな意気地なしは見るのもいやです。帰つてきても家へは入れません。死んで死んで骨になつて帰つて来なさい。(中略)一日も早くお前の死んで帰る日を母は待つて居ります。」

晃工はこの手紙に奮起し、歯を食いしばつて修業を続け、右腕の自由を失う不幸に見舞われると左手で創作し、ついには「昭和の左甚五郎」といわれる彫刻界の名匠に成長する。

標津博物館には、晃工の代表的な作品とともにこの手紙も展示されているが、おそらく涙でつづつたであろう、強く激しい文面ににじむ母の心情が、時代をこえて読む者の胸を打つ。

ひるがえつて、現代の親子の愛や絆について、考えさせられる一文である。

これが、展覧会の会場で友だちからもらった新聞のコピーである。私は、この一文を読みながら、涙が溢れてたまらなかった。

一人の立派な彫刻家を育てた母親の激しい愛。恐らく、これを受け取った阿部晃工氏も、涙を流しながら母親の心情を受け取った事であろう。すごい。ものすごい。

しかも、もう一つ私を驚かせた事は、この阿部晃工という彫刻家は、この会場で展覧会をやっている我々が属している会の、大先輩だった事である。

私がこの会に作品を出品し始めたのは、まだ二十歳前だった。そしてその頃、大柄で和服に袴姿の彫刻家が出て、何も知らない若僧の私たちに、何かと声をかけてくれたのである。作品の事やそのほかの事で、その人に私達は随分励まされたものであった。しかし、名前はわからなかった。そして、その思い出は忘れなかったが、その彫刻家の名前を知らずに、つい先日まで来てしまった。あの人が阿部晃工さんだったのである。

私達若者に、あんなに優しくったあの人の心も、あの、激しい母親の、深い愛情によって育てられたのかも知れない、と思ったのである。

学術もどきのつづき ⑤

若い人達と一緒に蔵王の山寮で

山形大学 仙道 富士郎

久しぶりに予定のない土、日曜でテニスができると算段していたのに、なんで私が蔵王の山に登って合宿に参加しなければならぬのか、参加する当日の朝になつても私はブツブツ言っていた。大学はいま、こうした教師の合宿研修が花盛りである。

ファカルティ

デイベロプメントと言う。「名教授とは学生が分らない難解な講義をするものだ」などとは、嘘いていたのも今は昔、いかに学生に分りやすい講義をするか、先生達は懸命になつて頭をひねる。というのも、大学はいま競争の時代に突入し、魅力のない講義が蔓延している

ような大学は、受験生が見向きもしてくれなくなり、とどのつまりは消滅してしまう可能性だってないことはない。少子時代の産物の一つではある。

実施要項には、蔵王はもう寒いから防寒具を用意してくるようであるとある。私は住生際悪く、まだブツブツ

言いながら、ももひきをはき、ダウンジャケットを腋にかかえた。

マイクロバス二台に分乗して山形大学の蔵王山寮に向う。大型バスは通れない細い道を通つて、一、六〇〇メートルまで登る。バスの中からもう研修は始まった。班毎に座席が決められており、研修のコーディネーターの音頭で自己紹介が始まり、次は「教養教育の問題点は何か」についての討論へと、コーディネーターが誘導していった。私と同じように、いわば動員されて来たらしい大学の住人達は、バスの中からもう始まった研修に一緒に不機嫌である。

山寮に到着すると、七人ずつに分けられた各班には、それぞれテーマが与えられ、忙しく事は進んでいく。私が大学祭でカレーを作ったことにちなんで(と言つても一緒に行った副学長の「カレー班にしたら」という一言で決つてしまい、「何でカレー班なんだ」と文句を言う御尽もいたが)カレー班と決つた私達の班に与えられたテーマは「山形大学を個性に輝く大学にするための講義」のプラン作りで、何とも難解な課題である。

まず目的を設定し、講義のタイトルを決め、次に講義の具体的な内容を策定する。

この各々の項目について、四〇分で討論し、その中で、皆の前で発表する内容をまとめる。二〇分間各班からの発表があり、三〇分間各班の発表に対する質疑応答を行う。昼すぎから始まった、いわばこのブレインストーミング(脳賦活化)は、夕食をはさんで、夜九時過ぎまで続けられた。私はクタクタに疲れてしまった。

私だけが六〇才台で、残りの人達は三〇、四〇才台で二〇才以上の開きがある。この私にとっては何とも疲れたこの教員研修会で、私は貴重なことを学んだ。

四〇分間で一つの問題について討論し、意見をまとめ、発表のレジュメを作ると言う、私にとってはとても考えられないような早業を、若い人達は実に上手に要領よくやつてのけることを気づいた。巡ぐりに司会者、記録係、発表者の順番が、廻つてくるのだが、私に司会者が廻ったときなどは、私は全く役に立たず、私ぬきで討論は進んで行った。

四分間に時間を区切つてする発表もおおむね実にまとまりがよく、上首尾なのである。年をとったことによる自分の能力低下のことを棚に上げて言わせてもらえば、私をうならせた若い人達の技の由来は、戦後改

善された教育のたまものなのではないかと思う。

私も含めて多くの老人は、学校教育が次第に荒廃してきたことを嘆くが、若い人達のこの高い能力を見て、嬉しくなつた。そして、多くの問題をかかえる山形大学ではあるが、こうした人達が大学のことを真摯に取り組んでくれれば、将来は暗くはないと思つたりもした。





クリスマス：卒園を前にして

高三 浩太

ここでの生活も残り四ヶ月になり、最後のクリスマスを迎えようとしています。少し前までは、施設にすることが嫌だったけど、今では、安心できる場所になったと思います。

あと何年ここにいらっしゃるのか、あと何ヶ月ここにいらっしゃるのかと思うようになり、寂しい感じがします。今の進路を決めるにも、たくさん職員に協力してもらって決めることができました。とても感謝しています。

毎年行われるページェントも年をおうごとに変わり、とうとう主役のヨセフになり、今年で最後なんだあつくづく思います。あんまりやりたくないけど、やるからには、精一杯やりたいと思います。

最後に、今までお世話になった人たちに心を込めて「ありがとう」と言いたいと思います。ここで生活できて、みんなに出会えて本当に良かったです。メリークリスマス!!

なると必ず思い出します。それと、同時に、「夢は捨てちゃダメだよ」サンタクロースは絶対いるんだから」というお母さんの言葉も思い出します。そんなこんなで、十四年目のクリスマスは私にとっても、みんなにとってもすばらしいクリスマスになれるといいな。

最高のクリスマスをサンタクロースからほしいなと思っています。

クリスマスに想う

高三 多歌音

光の子どもの家で過ごす最後のクリスマスを迎えることの自分の成長を大きく感じました。

去年の今頃は、何も考えずに月日がたつたように思います。今年は、高校三年生ということで自分の道を真剣に考える時期となりました。私は、今自分の夢に向かって頑張っています。来年の四月から自分の人生を自分で歩んでいくことになりました。私は、光の子どもの家に来て本当に良かったです。なぜかというとおいしいごはんが食べられて幸せだからです。そして色々な人達と出会ってよかったと思います。

今年のクリスマスを楽しみつつ、

神様について

六年 華美

神様はいつ生まれたの? いつ? ちょうどクリスマスの日、十二月二十五日に生まれたんだね。よかったあ。神様が生まれたから私達も一緒に生まれてきたんだね。今、きつと、私達の心の中は、嬉しい気持ちでいっぱいです。生まれたからこそクリスマススイブやクリスマスが迎ええられる。私は、嬉しいです。神様がいるからこそ、私達は神様にお会いできた。嬉しかった。

今年のプレゼントは何か? 誰にもらうのかな。神様がサンタさんになってサンタさんにもらうのかな。私は、こう思いました。これからも、ちゃんとした楽しいクリスマスを迎えたいです。

イエスさまについて

二年 洋

イエスさまは、十二月二十五日にうまれて、みんなでお祝いします。ぼくは、とても、ここががつくようになります。

ぼくは、一ばんやさしい人にあうことができます。だから、いきぶんです。

私にとってのクリスマス

高三 亜希

私にとって今年のクリスマスは、最後になってしまった。私の今までの十七年間のクリスマスは、すごく楽しかった。私が一番心に残っているのは、なんといってもページェン

トだ。三年間務めた天使長から主役の MARIA へと変わり、今私はとても緊張している。MARIA 役を、きれいな歌声と振り付けで演じたいです。みんなが心を一つにして、きれいな歌や演技が繰りひろげられたらいいなと思います。みんなが心を一つにして最後のクリスマスを過ごしたいです。

サンタクロースとクリスマス

中二 美恵

ここで迎える二回目のクリスマス。私が迎えるクリスマスは十四回目なのに、ここで迎えるのは、たった二回目なんて少しさびしい気がします。けれど、みんなで過ごすことでのクリスマスは私は好きです。そして、クリスマスといえばサンタさん。サンタクロースには深い思い出があります。小学校二年生の時...

朝起きて、ベッドの下を見るとそこには三つのプレゼントが置いてありました。私はすごくうれしくて、包装紙を開けようとしたその時でした。その包装紙がなんと、ダイエーのだったんです。その時の私の顔はカバが口を開けた時みたいないすこい顔でした。このことをクリスマスに

高一になって成長したと思うことは、やっぱり「心」かな? けつこう荒れてたから(笑) なんかは言えないけど...

とにかく大変だった。今思うと「なつかしい」だけ...(あんまり気にしない) ってこと。

今年は、色々な検定を受けるから更に忙しくなるけど自分なりに頑張ろうと思う。

最後に、メリークリスマス!!

中二 詩美

本当のクリスマス
クリスマスってよくわからないけど、喜んでた。なんでクリスマスやるのかもよくわからなかった。日本は、たぶん外国の影響でクリスマスを始めたんだと思う。

日本の子どもは、多分クリスマスの意味を知らない。でも教会に行っている人は知っていると思うけど。日本だけ多分仲間はずれ、言葉も、考え方も。私は、教会に行くことでクリスマスの意味を知ったと思う。クリスマス、それは宇宙の彼方からの贈り物...



MERRY CHRISTMAS

イエス様の誕生を待ち望みたいと思います。
クリスマスおめでとうございます。
みなさん良いクリスマスを迎えて下さい。
待ちに待ったクリスマス
中三 有希
今年も、もうすぐでクリスマスがやって来る。私は、ここにきて、「クリスマスってこんなふうに通ぐすんだな」って、つくづく思いました。みんな、アドベントをやりながら、クリスマスを待つって、ページェントのために、みんなでたくさん練習して...

クリスマスについて
高一 福子
メリークリスマスおめでとう。
今年もやっぱり早かった。あつという間に十二月? って感じがします。

プ・リ・ズ・ム

原田家日記

ここ最近の冷え込みも手伝ってか、子ども達の朝の目覚めは遅くなりがちです。眠い気持ちはとても良くわかりますが、小学生の登校時刻に合わせて子どもを起こし始めます。

まず、小学二年と三年の田部兄弟に声をかけます。「朝だよ！そろそろ起きよう！」「……」反応は全くありません。布団を取り、背中をさすり着替えを促します。動きは鈍いのですが、次の子どもを起こすために部屋を後にします。中学三年生のヒロミの部屋に入り、「おはよう！」と声をかけるとムクムクッと起きあがり無言で頷いています。その姿を確認してから小学六年生の華美の部屋へ。「華美！朝だよ、起きて支度をして！」「ンッ、シー……ッ！」不機嫌そうな顔がもぐり込んだ布団の隙間から見えています。体を引き起こすと、ゆっくりと動き始めます。華美の身支度を横目で見ながら、隣部屋の高校三年生、浩太に声をかけ

ます。「朝だぞ！」「……わかった」返事のわりには、布団から出られませんが。

再び田部兄弟の部屋へ向かいます。ダイニングではヒロミが朝食の準備を手伝っています。部屋に入ると、やはり二人は寝息を立てていました。窓を開けると「寒いよー」と二人の声。「寒かったら早く起きて、着替えなさい！」そう言い残して、仙道家・佐藤家を一回りして戻るとダイニングにはまだヒロミしかいません。部屋を見に行くと、田部兄弟はのんびりと着替えをしています。華美を探し、辺りを見回すとタンスの影に隠れていました。朝からかくれんぼの気分だったようです。

時計を見ると、六時半を過ぎているではありませんか！ようやく朝食を終え、登校準備をしますが、次々と忘れ物が出てきます。慌ただしさの中やっと集合場所へと送り出します。何とか今日も無事に登校することができました。朝からとても賑やかですが元気でいられることが一番です。

二学期も残り数日、子ども達と共にクリスマスワクワクと心待ちにしているこの頃です。 中川 昭雄



光の中で

佐藤家

木枯らし一番も吹き、めっきり寒くなつて参りましたが、皆さまはいかがお過ごしでしょうか？

一番長い二学期もあとわずかです。終わろうとしています。そして、子ども達にとっても楽しいクリスマスももうすぐです。

去年の今頃は単純にクリスマスを楽しみにしていたグループで最年長の多歌音は、今年はクリスマス前

に大事な受験があります。多歌音は、「人の命にかかわる仕事に准看護婦」を目指しています。現在、私立の病院の試験には合格していますが、准看護学校の試験に合格する事が内定の条件になっています。今、多歌音は決して得意とは言えない科目の勉強を頑張っています。受験勉強は、やつてもやりすぎるといふ事はありませんが、どんなにやっても不安になります。多歌音は入所してからずっと同じ担当者の元で成長してきましたが、昨年から私に担当が変わり、様々な不安定さを表現してきました。まだまだ私自身が子どもでも多歌音の思いに敏感になれず、話を聴く事さえ十分にできていません。十八歳で社会にでるといふ厳しい現実を受け止め、なんとか前向きに進めるよう、多歌音の事を考え、思うひとりでありたいと思っています。今は、多歌音にとっても、私にとっても試験の時のように思えます。

私は、二歳で初めて実家を出て、今ここで生活しているわけですが、ここに来て一年、去年はすぐに体調

を崩してしまい、正直言って身体的にも精神的にも辛い時が多くありました。しかし、実家に帰ることで、ただ家にいるだけで楽になりました。あと四ヶ月でここを旅立つ多歌音も同じような思いを経験するだろうと思います。楽しいだけではない、辛い時、苦しい時、共にいて、励ましてくれたり、共感してくれた人がこれから先の人生に必要だと思っています。多歌音にとって、そういう存在のひとりである為に、多歌音と共に過ごす一日一日を大事にしていきたいと思っています。

多歌音が、光の子どもの家で迎える最後のクリスマスをただ楽しいだけでなく、光の子どもの家が心を休められる場所となるよう、深く心に残るクリスマスにしていきたいと思っています。

市川 美穂

河のほとり

倉澤家

クリスマスおめでとうございます。十一月も半ばを過ぎると食卓の話題にクリスマスが登場します。一番の関心は、ページェントの配役のようですが全員が自分の希望通りにというわけにはいきません。それでもここ数年で主役のヨセフとマリアはその年の高校三年生が務めるとい



子どもたちの季節

私が、光の子どもの家に四月よりお世話になり、はや八ヶ月が過ぎようとしています。日々、子どもから、そして先輩職員から「大切なこと」を学んでいます。

日常の中の職員の子どもの対応には心から感心するばかりです。私の一番身近なお手本は仙道家の池田祐子さんです。優しく時に厳しく、そして楽しい時間を作り出してくれています。子どもといつも真剣に向かい合っており、私までもつい甘えてしまいそうになります。

受け持つ子ども達には、私の力不足で不安定な思いをさせてしまった、適切な判断が遅れたり、反省の毎日です。

特に佳美の行動はいつも不安定さを感じます。その場では、どうして？

などと思ってしまうのですが、落ち着いて見つめ直すと、やはり私自身の努力不足を痛感します。パニックを起こし吠えるように泣き叫ぶ佳美を抱きしめていると、私の心はズキズキ痛み、立場も忘れ涙が出そうになります。でも、私を一番励ましてくれるのは、佳美なのです。見かけはともにかワイイ女の子の佳美なのに、

優しい表現が苦手で、ぶつきらぼうな言葉で、周りに誰もいないとき私にこう言います。「優佳、大丈夫か？」眠るときにこう言います。「布団一枚で寒くないか？ウチのを一緒にかけるか？」

そんな優しさが、私を支えてくれていて、と心から思います。

これからも、光の子どもの家でみんなと暮らせることに感謝し、忙しさに流されることのないよう、季節のうつり変わりを子ども達と楽しみたいと思います。

北谷 優佳



現場から

続・光の子らしく

⑧ 岩崎 まり子

随分と寒くなってきました。今はまだ、木々の葉も思い思いに色付いている頃ですが、このお便りが届く頃にはもう、冬の景色になっていることでしょう。

皆様、いかがお過ごしですか。萌季さんがアメリカへ出発して、もう早いもので一カ月が過ぎました。同時多発テロやそれに続くアフガニスタンへの報復空爆などの影響で、いつじが下りるかわからないという緊迫した状況。それに加えて、竹花保育士から譲り受けたスツケースのダイヤルロックの番号がわからないなどという非常にナンセンスな・しかも、出発の三〇分前にそれを言

い出す彼女ののんびりさ加減！・・・緊迫感の中での出発でした。

見送りは家の駐車場迄にしました。施設長と穴水指導員が現地までと空港までとそれぞれ見送ってくれました。駐車場で「ほら、まり子さん、泣かなきゃ」と言われましたが泣きませんでした。私は、情緒的に何か欠けがあるのかもしれないと思うのですが、子どもの退所の日に泣いたのは、最初だけでした。親元に帰したその時だけです。後はやり残したことや伝えきれなかったことなどが多すぎて、この先一人で生きていくその子どもに対して申し訳なさや心配で、思わず眉間にしわが寄って

しまうほどです。ただ、自分の親元を離れてここに来た時のことを思い出すと、母は涙をこらえてか目の縁を赤くしていました。やはり、泣けない私は、失格でしょうか。

思えば萌季さんとの後半の数か月、声を荒げることが多かったように思います。「留学したい」——そう決めてからも人任せな生活は続き、そのことで随分叱つてしまいました。本当は人任せで何とかなるような生活を十七年間続けさせてしまったことの責任は、私にあるということでは十分わかっていたのですが、それでも「今、伝えなければ」と私も必死でした。どうしてもっと前から伝えてこなかったのかと悔やみながら。大切な彼女の時間を無駄にしようと思ったことはありませんが、退所の時を目の前に今より未熟だった自分

大学受験に失敗してしまったことは大きな挫折だったと思いますが、そのことで留学、しかもホームステイという彼女が思い焦がれていた普通の家庭で暮らすことが実現したことには、何か人知を超えた意図を思わずにはられません。

無駄とか無駄でないとかは、他人が、人が勝手に判断すべきことではないのかも知れません。無駄にしない決心することがとても大切なのでしよう。今を無駄にせず、どうかその家庭で過ごす間、彼女がすべきことやできることを全てやり、人との繋がりの中で感謝しつつ成長できますようにと、心から願っています。そんなことを思いながら、新たなスタートをきっている彼女へクリスマスプレゼントを探し歩いているところです。



分に腹立たしさと後悔を感じずにいられませんでした。親に手放され、生命身体の安全の確保のため家庭から切り離され、施設生活を続けるを得なかった萌季さん。



養護メモ 90

出 発 その2

菅原 哲男

虐待を受けた子どもが大人になって親になった時その子どもを虐待するに至る、という「世代間伝達」なる学説が、いわゆる学者研究者などが横のものを縦にしながらいだしてからずいぶん経つが、その言説は今や半ば常識化してしまっている。

そのような言説を、現場で子育てに関わっている者が聞いたとして、「さあ、がんばってこの虐待を受けてしまった子どもを育てていこう」などと元氣になって養育を励むことが出来るだろうか。また、「あなたはあなたの親たちから虐待を受けてしまったから、あなたが親になった時きつとあなたはあなたの子どもを虐待することになるだろう」と言われた子どもが、「そうか、それじゃあしつかり虐待の親になろう」などと張り切るだろうか。

たとえそれが統計上有意であると確認された学説であつたとして、人が生きていく上で役に立つことが出来ないばかりか、生きていくことにブレーキになり、マイナスをもたらし、公表を控えるべきものではないだろ

うか。全ての科学や文化が、人間の生活をよりよいものにするために存在するのであるならば。

世代間伝達が動かしがたいほどに有意な統計上の学説であるならば、そのマイナスの永久連鎖でしかない言説を突破し、解決する手がかりを提供してこそ有用な学説といえるのではないかと、これを聞いた時から焦燥感を伴いながら考えてきた。

だから、不適切な関わりである虐待を被ってしまった子どもたちに対する真実告知には、世代間伝達などというマイナス・それも途方もないマイナスの永久連鎖を突破し克服する可能性のようなものを、一方で持たなければとうて不可能なものなのである。

まず、途方もないマイナスの連鎖でしかない事実を、可能な限りマイナスを減じる努力をして選び抜いた「ことば」を用いて、慎重に伝えなければならぬのである。それでもマイナスはマイナスなのであり、その告知を受けた子どもは当然衝撃を受け、それからそのことがいつでもどこでも、顔を出すことになるの

だろう。負わされた虐待というマイナス、心的外傷を負いながら、それが動かしがたい現実としてもう一度負いかかるのである。

だから、生まれてきたことを喜ばれないばかりか、迷惑であり、存在そのものを無くしてしまいたいほどに嫌悪されてきた・それが虐待の動機である場合が多いのである・・・そんな子どもたちとの出会いを喜び、祝うような日常が、拒否され嫌悪された日々の数倍もの期間、積み重ねられなければならないのである。

児童養護施設光の子どもの家の、子どもとの日常的な関わりや生活づくりは、誕生日を祝うことを起点としてインスパイアーされていくものでなければならぬと考えてきた。

『君と出会えてよかった！』『君が生まれてきたことをみんなこんなに喜んでいる！』『君がいなかったら、ここはどんなに寂しく意味のない場所になってしまうだろう』というメッセージを不断に伝えることが生活の基底を形成しなければならぬのである。殊に、血縁のない赤の他人が、血縁がもたらしたマイナスを克服するのであるから、その質量は莫大なものになってしまうのである。血縁の親たちによって否定された存在を肯定し続け、赤の他人であ

る私たちからの存在への肯定を、まさしく自らの肯定として信じ、その生を肯定出来るまで続けなければならないのである。

萌季と岩崎を中心にしたそれを取り巻く人間関係や暮らしは、そんな日常を繰り返して積み重ねてきた。もちろんそんな暮らしの中に危機的な状況や不安の表現などは数え切れないほどあったのではあるが・・・

思春期前期頃からの、『みんな私を冷たい目で見て』『何で私だけが施設なんかで暮らさなければならぬのよ』『普通の家で暮らしたかった』『どうせ私は・』といったマイナスのセルフイメージがもたらす葛藤はすさまじいものがあつただろうと思われる。

当然、不安定がもたらす表現は、非社会的な言動となつたのであつた。そんなときの彼女は、体中から拒否のストロークを放出し、辺りの者たちに針のような鋭い目や言葉を投げつけるのだった。

中学生の頃から高校生活の前半にそういう言動がしばしば現れた。そんなとき、岩崎はいつも萌季の立場に立ち続け、弁明し謝罪して回るのがだった。

そのようにして萌季は思春期の危機を乗り越えてきた。(以下次号)



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

6月1日 ▶ 7月末日

- 6月
5日 「しずくの会」草取りご奉仕
6日 第八回職員確保のためのバザーの値段付け
9日 第八回バザー 晴天に恵まれてたくさんのお客様がおいでになり、後援会、しずくの会などに若い聖学院大学、青山学院大学、東洋英和女子学院大学、埼玉福祉専門学校、埼玉県立大学生が大勢加わって
14日 児童養護施設山梨立正光生園より跡野保育士が22日平山保育士が来訪宿泊して研修と交歓の一泊二日
○ 児童養護施設設立計画の秩父正峰会より見学・研修
17日 職員の応援によって日舞を習っている美季の大ざらいがバストラル加須大ホールで見事に踊りきる
○ 菅原施設長が大利根藤幼稚園父母の会で講演。
25日 中学・高校三年生に進学希望の意思確認
今月の物品ご寄贈者 しずくの会 大利根藤幼稚園父母の会 豊国道江 栗橋キリスト教会 白田紀男 横村スミ子 美濃部正子 吉松みどり 杉山登志実 黒田泰子 古川景子 加藤晶子 末柄久子 小林千江子 宝月寿子 水谷敦子 伊村幸子 宮崎靖子 新井摂子 松本静江 岩本守弘 永富千穂 飯野弥生 古谷野利子 新井まり子 モトイ種苗 コヤノ亨 田部井竹子 落合美佐子 山水まさ 渋谷澤 大橋清栄 岡美子 網取八重子 中島睦雄 東大宮教会員 竹林寅雄 樋口智子 鈴木あや子 斉藤

- 久美子 南条トヨ子 栗橋タカラブネ ハムコ会鹿島支部 吉田誠 島田商店 ハーバーライフオブジャパン 雄文社 太田敏子 松本明子の各位様
7月
11日 埼玉県指導監査
13日 児童養護施設若竹ホームより7名来訪し研修と交歓
16日 原道小学校教師と夏休みの課題など情報交換と協議
18日 南埼玉地区の蕎麦業界有志が手打ちそば会
20日 菅野児童精神医来訪して子どもへの関わりのスーパーヴァイズを8時間も ありがとうございました
21日 夏休みオープニングフェスティバル
23日 アメリカカリフォルニア大学ディビス校からジミー・ウォンさんがインターンシップで来訪8週間
25～28日 小学生グループが谷本画伯の長野県小海町のアトリエに宿泊してハケ岳登山を今年も 感謝
29～31日 幼児グループが谷本画伯の長野県小海町のアトリエに宿泊してハケ岳登山を今年も 感謝
30日 江森ヘヤーサロン・散髪ご奉仕 ありがとう！
今月の物品ご寄贈者 大利根藤幼稚園 菅原満喜 倉沢三男 台正義 柴田 須藤保の各位様
たくさんの方々のご助力により、今年の夏休みも楽しく、そして胸躍る冒険などに挑戦することができました。(くら)

反 射 光

☆ノエル！クリスマスのお喜びを申し上げます☆毎年、期末試験の後には子どもたちの顔はクリスマス色に豊に染め上げられ、メルヘンチックでファンタスティックな日々が重なります☆しかし、この世紀も、メルヘンやファンタジーを排し、不可思議を追い払ったもりの文明が、自分だけの正義を傲慢に振りかざして人々を陥れ殺傷するに至った愚をまた繰り返していく傾きを感じます☆元来人間に正義など不可能は明白なのに、今日もその正義の呪文によって消し去られる命たちがどれ程いるのでしょうか☆そんな危機をすんでの事で逃れられた幼く年若い魂たちとのささやかな暮らしを丁寧で営んでいきたいと心から願います☆試行錯誤の中で錯誤の責めを負いきれない私たちは、穏やかに赦されて隣り合うこと以外平和に生きるすべはないのです☆そのことをこの世に啓示された純白の正義なるイエスをこそ！☆この年のお支えを心から感謝し、よいお年を祈り、更なるご支援を切に願います。
(哲)